



二 整 秀
知 義
部 藤 山
阿 伊 中
集

現代日本文學全集

44



筑 摩 書 房 版

阿部知二
伊藤整
中山義秀集

昭和三十年七月一日 印刷
昭和三十年七月五日 發行

著者

阿部知二
伊藤整
中山義秀

發行者

東京都千代田區神田小川町二ノ八
古田 晁

印刷者

東京都青森市根ヶ布三八五
山田 一雄

發行所

東京都千代田區神田小川町二ノ八
筑摩書房

〔電話〕東京二九局(29)七六五一(代表)
振替 東京 一六五七六八

製版 印刷 監製
株式會社 株式會社 株式會社
精興 精興 精興
株式會社 株式會社 株式會社
高陽 高陽 高陽
堂社 堂社 堂社

阿部知二集 目次

冬の宿 五

日獨對抗競技 七八

おぼろ夜 八四

伊藤 整集 目次

鳴海仙吉 一九

近代日本人の發想の諸形式 二七九

中山義秀集 目次

厚物咲 三〇五

碑 三二〇

華 燭 三四〇

春 日 三五三

宋蓮花 三六一

桃 山 三八一

阿部知二論（佐々木基一）	三九三
伊藤 整論（平野 謙）	三九九
中山義秀（田宮虎彦）	四〇六
解 說	四二一
年 譜	四二八

裝幀 恩地孝四郎

阿部知二集

西安にて

大慈恩寺大雁塔

をのぼりくれば

終南山を一つ、

むらさき雲

知二

冬の宿

第一章

……私の記憶はみな何かの季節の色に染まっている。それは、映画のフィルム（フィルム）の一齣（ひとく）ずつがいろいろな色を持つているようなものであるが、その記憶のフィルムの色はいつも正確な暦の上の季節と一致しているというわけではない。夏の日の出来ごとが秋の感覚を伴つて想い出されることもあり、秋のことが晩春の甘い色に染まつて想い出されることもある。また、ある年の冬ならば多に、三日續いて起つたことの、はじめの日はほんとうに冬のように、次の日は春、その次の日は秋、のことであつたように錯覚されることもある。これはその事件の性質や、その時の私の心の状態や、その事件に出てくる人物たちの性格容貌などによつてそうなるのだと思つてゐる。

……いま、數年まえに霧島家に寄寓してゐたときのことを想い出すと、その秋から春にかけての出来事のすべてが、まつたく初めからおわりまですこしの隙もなく暗く冷却した冬の色に

塗られてしまつてゐるのだが、これは、あの一家の生活状態、私のそのころの氣持、すべてが春や夏のような空氣の一つも持つてゐなかつたことのためであらう。そのころの私は地方の高等學校から出てきて伯父の家に泊つてゐたが、學校にもあまり出ず、快活に友達つきあうのでもなく、まつたく人嫌いな心持になつてゐた。

その時代の風潮として、身に近い友達が争つて社會運動に入つてゆくを見送りながら、心細い氣持で古い外國の文學をばかり讀んでゐた。華美な伯父の家の空氣に反撥しながら、その従妹たちをとりまく娘たちのあれこれに戀愛して

みたりやめてみたりしてゐた。そのなかで、庵原はま江という音楽の好きな少女が、しばらく心安かつたがそれも夏の避暑地でほかの青年に出逢つてからは私を馬鹿にしはじめたし、友達のたれかれが官憲に逮捕されるというようなこととおこつたりしたので、私は一層孤獨な氣持になつてしまつた。どこかの下宿に一人で暮しなくかつた。學校にも友人にも伯父の家にもなるべくかけはなれたところに行きたふと思つた。

ほのぼのと明るく暖かい秋の暮のある日に、私は省線のK驛に出任せに降りてそのあたりの家をさがしてみた。線路の内側の高臺には大きな邸宅が杜につつまれ、段々になつて連つてゐたから、私を泊めてくれるような家はないと思つた。反對の側に出てゆくと、郊外の街道の兩側には小さな貧しそうな店がつづき、町裏の低地には汚れた小工場が立ち並んでいて、そこにも

探すような家があるとも思えなかつた。仕方なしに、次の驛まで歩いてゆくことにしていると、しばらく泥濘（どろ）の匂いの深い、暗い貧民街の家並がつづいていて、この低い家はどこまでもつづくようにみえ、自分はどこに行つてゐるのかしばらくは見當もつかなかつたが、まもなく低地のひろがりは次第に狹まり、小さな石鹼工場のところまでくると、細い徑がその工場の裏で、白ちやけた雜草の生えた崖につきあたり、崖の上には樹々と屋根が一面にいま落日に眞紅に染まつてゐる小住宅街があるらしかつた。汚れた着物をきて遊んでゐる子供たちに怪しまれながら崖を傳つてその住宅街にのぼつてゆくと、そこは凸凹の多い一帯の高臺で、下の工場からの煙で黒くなつた屋根が樹々にかこまれて不規則に並び、粗末な生垣のかげに小月給取などの住宅らしいものが肩をならべてゐた。その眞ん中のあたりに來たと思ふとき、昔の武藏野の名残りとも思われる高い櫟（かき）の樹立がそびえていて、いまは秋の落日のなかに、黄色に染まつた空から黄金色の枯葉を雨のふるように落してゐた。そのかげに、屋根に落葉をためた小さな古びた二階家が一かたまりになつて崖に寄りそひ、そこだけはひどくしずかなおもむきがあつた。崖にひとかたまり白い花の群がみえたので近づいてみると、それは咲きほうけて色が褪せかけた野菊の花であつたが、その時、私は一軒の家の格子戸に「かしま」と細々とした女の手でかかれた半紙が半ばとれかけて風にひらめいて

いるのをみた。中に入つてゆくと三十を少しすぎた、色の白い女が出てきて上品に挨拶した。彼女は、私の田舎の母が昔のころ着ていたような、澁く着い底光りをもつた地味な絹物をきていたが、この蒼光りする着物につつまれた彼女の白い圓い顔、観音眉、黒い切長の眼、壺輪のように切れ込んだ口、また、静脈が一々浮びあがつているような白い手などの全體が、私には古い陶器の光澤、硬さ、色、冷やかさ、を思わせた。部屋をみせてほしいというとか、どこかの地方訛のこつたなめらかな言葉で、顔を赤らめながら、すこし警戒するように、私の學校や今迄いたところや郷里を訊ねたのだつたが、學校とはあまりにかけはなれたこんなところに部屋を採しにきたことだけは少し不思議に思つたらしいが、ただ静かな生活がしたいからだと思つたと、そのほかに警戒することも無いと思つたのだらう、古風な屏風のある玄關から、粗末な木材のきしむ狭い階段を二階に案内してくれた。

二階には六疊と四疊半の二つの室があつた。南と西に向いた六疊をかせようといふのであつた。窓からは眞向に葉が疎になつた櫻の樹立があり、その枝の間からは、西日に染まつた一帯の傾斜地の家並が、向うの工場地、その向うの高臺へとつづいてた。西日に射しこまれて、ざらざらの壁面をみせている部屋の中で、私の目についたものも、この女の顔や着物に負けぬほど變つたところがあつた。小さな床には、

古びた俳句の軸があつた。その草書は、私には「ずず蟲の……」までしか判じられなかつた。壁の正面には、燕尾服をきた男の半身像の寫眞がある。彼は角刈の巨漢であつて、濃い眉と、大きな吊り上つた眼と、圓く坐つた鼻と、黒々とした髭の下の大きな口を持つた四角な顔とを眞正面から此方に向けて睨みつけ、襟には菊の造花を挿し、腕を背にまわして反りかえつてゐる。私は吹き出しそうになつたが、傍に立ちながら、私がその寫眞を見つけた表情を感じて、明い光の中で頬を赤らめている女を見て我慢して眼をそらした。すると一方の壁には、氣持のいい素描の版畫があつた。疎な林のかげの草地のうえに、向いあつてゆるやかに身を横たえている男と女との素描である。ちかづいてみると「マティス」という署名があつた。巨漢の寫眞は、この抒情的な繪を、西日に火照つた室の中で睨みつけてゐるのだ。さらに眼をそらし、櫛のあいだから隣の室をみると、この家の子供のものらしい机があり、小學校の教科書がのつていたが、その前には、濃厚な色刷りの、基督の繪が二枚ある。一つは、しろじろとした裸身に釘を打たれて血を眞紅に流している圖であり、一つは跪いて天に祈つてゐる圖である。しばらくして私は細かい條件などきくこともなしに、いつのまにか、この室を借りる約束をしてしまつてゐる自分に氣がついた。もう日は向うの岡に沈んでいて、室は暗くなり、マティスは巨漢もキリストも俳句も醜氣になり、冷た

い陶器の肌のような女の顔ばかりが蒼白く光つていた。これはどういふことになるのだらう、と思ひながら、前金を置くといそいで家を出た。室でみたさまざまのもの、女、着物、すべて、好奇心を惹いたことはほんとうであつたが、私はそれをどういふ風に結びつけて、その家をどういふ風に考えていいかわからなかつた。

その家に移ることにきめたと伯父に話すと、彼はその家が學校からは今の倍も遠くなるといふことを言つて苦笑したが、もはや勸告しても何にもならぬと思つたのであらうし、また伯父の子供たちに自墮落な風習を感染させる私を、かねて遠ざけようと思つてゐたのでもあらうか、止めようともしなかつた。後からこの移轉をきいた友達も、何かの魂膽があつてそうしたのであらうと推測するほどのこともなく、ただ、ぼんやりとした精神狀態の男にありがちな氣紛れだらうといふように解釋したらしかつた。

移ることにした日の朝おきてみると、冷たい霖雨がしきりに降つていたが、その雨の時には氷片をまじえた雲になつたり、強い風を伴つたりして、とうとう三日間降りつづいてしまつた。そのあいだに、あの家について感じた私の少しばかりの好奇心もさめてしまい、マティスもキリストも女も寫眞もはや強い印象をあたえるのでもなく、しだいに引越しが億劫になつて行つたのだつた。晴れた四日目に身を起して荷物をまとめたのは、ただ、約束をしたからそれ

實行するという負擔を感じていたからであつた。荷車がついたと思うころに、坂路をその家に向つて登つてゆくと、泥濘の深いその路からみた一郭の風景は、あのとときと別のものではなかつたか、と思うほど變つていた。まだ晴れ切らず、時々、雪を含んだ灰色の雲が低く垂れてきてあたりを蔽ひ、樗の樹立はこの一雨に黄金の葉をすつかり落してしまつて、骨張つた枯枝ばかりを空にひろげていた。濡れた屋根の群は黒ずんでうずくまつていた。崖路の菊は雨に腐つてしまつていた。私を迎えてくれた女の顔は一層白く蒼ざめ、あの西日の中で火照つていた陶器の光澤ではなく、暗い冬の中で火照つていた陶器よりもつと冷たくなつて光を底に凍らせてしまつた陶器の感覺があり、その言葉も、凜として刺すような響きがあつた。室には、子供の机も、燕尾服の寫眞も剝ぎとられ、ただマティスの繪だけが残つていた。魔術のように變つてしまつた「冬の家」に私は入つてきたのである。マティスの繪をみたときそのことははつきり感じられた。四日前にみたときは、その繪の疎な林は、その枝と幹の線條のあいだに何かやわらかに光る若芽がついていると感じられ、樹々の奥には小鳥の聲がきこえ、流れか泉かのさざめきさえあり、男と女とは青々としげつてところどころに花の咲いた草上に、抱擁のあとのつかれにでも身をよこたえながら、涼しい眼で互を愛のある心をこめてながめあい、汗ばんだ肌を流れか泉かで水を浴びてあらおうとしているよ

うにみえたのだつた。實際かれらの足元に粗略に描かれた草の線は、萌え立つ綠色、マーガレットの白、罌粟の紅さえ心の眼に沁むほど感じられたものだ。あたかな風と、濃い空氣の匂いとが畫面から流れてきていた。しかし、今は、林はただ裸木の骨組だけしかみえず、その疎な樹間からは冷たい風が吹き、地は凍てつき、枯草のうえの男と女とは、何か取りかえしもつかぬ過去をたがいに歎きあい恨みあつて、身をすくめて懷えをこらえているようにしかみえないのだ。

女は茶をすすめながら、私について簡単に身分や經歷をきいた。今度は私がこの霧島家のことをきく番であつたろうが、私は世馴れた風にかんな女にききただす仕方を知らなかつた。壁面に白い跡をのこして消え去つた燕尾服の男は、この家の主人、門札に出ている霧島嘉門であるかどうか、一體この家は何をしてくらしているのか——そうしたことをちよつと訊ねてはみたかつたが、結局、いそいできくこともないと思つてやめた。女は、私の心を讀んだのであろうか。平坦な口調でいつた。

「あのおかしな寫眞が主人でございます。今日はおもう直ぐ勤めからかえつてまいりますが、變り者ですからいろいろ失禮があるかわかりませうが、許して下さいますように。ほかに小學校三年の輝雄という男の子と、一年の咲子という女の子とございますが、上の方は悪戯で、下の方は泣いてばかり居ります。これも許して下さい

いまし。私たちは三年ほど前に、中國のあるところからこちらにまいりました。」
 そういつて、女は降りて行こうとしたが、襖のところで立ちどまつて、「あなたは基督教ではございせんか。」とたずねた。

「いいえ。」
 「それでは基督教はお嫌いではないでしょうか。」

「好きでも嫌いでもありません。」私は冷淡にこたえた。

彼女が「私どもはクリスチャンです。」と、驚くほど強くきつぱりといつて降りて行つた。ひとりで荷を解いているとき、子供たちが歸つてきた音がした、と思うと、讚美歌の聲がきこえてきた。

きよき岸邊に やがてつきて

あまつみに つひにのぼらん

その中に男の子の甲高い聲と、弱々しい女の子の聲とがききわけられたが、一番高くひびき、何か狂熱を帯びているようにひびくのは母の聲であつた。飛んだところにきたものだ、これよりは伯父の家の輕薄な陽氣さの方がよかつたかも知れぬ、と思つているとき、母につれられて、挨拶しに、子供たちが上つてきた。兄も妹も母に似て色が白く、兄は神經質な眼と、濃い眉をもち、妹は長い睫毛のあるかわい顔をしていて、母の後から頭をさげると、恥ずかしそうに降りて行つた。降りかけに、兄は眉をびくびくとさせたとすると、いきなり妹の髪の毛を引

張つた。妹はひいひいと泣き出した。私は急いで従妹が饒別にくれた菓子子を妹にやつてその頭を撫でたが、その皮膚は泡にさわるようにやわらかく、融けてしまひそうに私の手には感じられた。私をおそれるおそれる見上げた茶色の眼からはとめどもなく涙が流れ出すのであつた。

階下からは夕餉の肉を煮る匂いが流れ、主婦の讚美歌と咲子の泣きこえとが、それから、高く低くつづく夕方の街の物音と櫻の梢に鳴る風の音とに交つてきこえてきた。私は疲れて荷物の片付けも中途でやめて、蒲團の山のうえに仰向きに倒れて眼をとじ、その匂いをかき物音をききながら、遠いところにひとりの旅にでもきたような氣持になつていた。すると階段が今度はみしみしと大きく鳴りひびいたので、眼をひらいて振りむくと、暗い踊場のところに、まず、いが栗坊主の巨大な頭がみえ、支那人が『水滸傳』の豪傑あたりに臥蠶と形容した太い眉毛がみえ、それから、吊り上つてやや充血した眼玉、剃りあとの青い頬、大きな口、四角な顎があらわれて、びたりとこちらをみた。あの寫眞の主だな、と思ううちに、いかり肩、厚い胸部、ふくれた腹、大きな腰、大きな脚部が、浪底からあらわれる海坊主のように階段から浮かびあがり、その六尺に近い身體が数段の前に直立したが、急に私の前に坐り、私が居すまいを直すひまもなく、耳に鳴りひびく聲を發した。「わたくしが霧島嘉門というものです。内閣調査局に勤務して居ります。」

私は手短かに自分のことを紹介した。

「わたくしは留守勝ちですから、よろしく願います。留守勝ちですから。」と念を入れるように私を見据えた。

その體は恐いほどいかめしく、聲は大きかつたが、しばらくするうちに、それには何の邪氣もない單純さがあるだけのことで、暴々しくみえる形相すが、威張つた子供の顔のように他愛ないものでないかと、思うほどの餘裕が出來たので、私は持つてきた菓子子をすすめ、煙草をすすめた。

「わたくしはクリスチャンですから、煙草はやりません。」今度のその聲の大ききには、やや落ちつきを取戻しかけていた私もまた驚いてしまつた。それは家中を震動させたのである。とみると、彼の手はそのときにもう一本の煙草を握んで、喘ぐように低い聲で「一本いいただきませう。」といつた。

「實は家内にきこえるようにあいつたのです。」彼が最初の煙を厚い胸の奥深く吸ひこむときに開いた眼の輝きをみていゝと、これはただの煙草でなく、世にも珍しい麻酔薬のようなものであるようだつた。

「わたくしの一家は落ちぶれてしまつたものです。今はまつたく窮地に陥つて、他人に問貸しまですることになつてしまいました。どうぞよろしく。」

私はここで大體この家のことは想像ができる

と思つた。この主人、妻、子供たちの體質や容貌にも、どこかに特異なものがあり、部屋の調度や服裝にも變つたところのあるものも、かつて彼等が地方の舊家ででもあつたということでは明はつくわけだ。どうして落魄したか、それがどうして基督教徒であるか、などということは分らないにしても、これは別に浪漫的な好奇心を湧かすことでも何でもない、といふまでの私の好奇心を笑い、また少しはがつかりしたのである。

嘉門は菓子子をむさぼり、煙草の匂いを消すためだろうか、茶を何杯も飲んで口をがらりと鳴らせたが、立ち上つて私を錢湯に誘つた。彼のあとからついて降りると男の子が私に口を曲げて「い、い、い。」という風をしてみせたが、それは私が彼の妹を可愛がりすぎたと思つて嘲弄したのであらう。嘉門は、「まつ子！ 風呂にゆくから飯を早くこしらえて待て！」と呶鳴りながら、汚れて古びた黄八丈の丹前ときかえ、肩をふりながら日暮れの街に私を従えて出た。夕飯前の錢湯は一杯の人だつたが、労働者よりは勤人が多いとみえて、みな私と似寄つた蒼白く薄く細いからだの裸形が湯氣の中に入りみだれていたのだが、その群の中に裸になつて立つた嘉門の堂々たる體軀はたちまちみなを威壓してしまつた。黒々と毛が生えた胸部、大きな腹、腰、腿、が、皆をかきわけ進むときに、他のものの體は影のようにしかみえなかつた。彼は改めて私のからだをみて、憐むような顔をしたが、

一番熱い湯が出ているところに飛込んで行つて、ざぶりと頭ごと漬つてしまひ、しばらくして太い息を吐いて頭だけあらわし、太い頸のついた頭を、海豹のようになぶるぶると振つて水を飛ばし、それからまた驚くほどながい間湯につかっていたが、やがて水沫をあげて全身をあらわした。全身は眞紅に輝いていた。私はただ感謝して彼を見つめた。

夕飯にはみなで一緒についた。私は箸をとつて食おうとするとき、ふと皆がうなだれているのに氣づいた。まつ子が静かな夕餉の祈りをしていたのである。嘉門は、「アーメン。」と大聲でいつて、もう肉切れに嚙りつき、それから幾杯となく飯をかえ、お菜が少いというのであつた。輝雄は隣の妹を始終いじめている。嘉門は忙しく口を動かすひまひまにそれに氣づくと、輝雄をしかりつける。まつ子は、輝雄をかばつて嘉門をたしなめる。「何くそ！ 貴様の教育が悪い。」と嘉門が妻に食つてかかる。咲子はそのあいだにもうひいひいと泣いている。「お恥ずかしいことです。」とまつ子は眼を伏せていつた。

「ははは、クリスチャンといつてもうちのはまだ充分なので、家内に引きずられてゐるのです。」と嘉門はいつた。

それから彼は、なかば愚痴のように、なかば自慢するように、彼の家の歴史を話してきかせたのだ。その歴史の立派な部分には、まつ子も眼で同意するのだが、零落してゆく區切り區切

り——それはいずれもみな、嘉門の愚行のためであるが、その點を嘉門がごまかしてはなすときには、いかにも口惜しそうな顔をし、それから諦めの色をうかづいた。

……霧島家は、瀬戸内海に向つて北に山を負つた地方の舊家であつた。昔は、田地と、廣大な鹽田と、廻送船を持つていて、嘉門はその長男に生れて思ふままの榮耀をしてくらした。彼の地方で最初に自轉車にのつたのも、オートバイを買つたのも彼である。中學にも行けないほど我儘に育つて、もう少年のころから遊蕩の味を知つてしまつた。二十すぎの頃父をなくしてからはずとなく思ふままにくらした。紡績工場を造つて社長になつたがこれはすぐ飽きて、他人に渡してしまつた。人に煽てられて郡會議員になつた。

「ああ、あの二階にはつてあつた寫眞を御覽でしたか。あれは僕のその頃です。あれは、立憲民主黨の大田剛先生を迎えて演説會をしたとき、司會者をした記念です。」といひながら嘉門は立ち上つて腕を後にまわして胸を張つて、張り裂けるような大聲で、「諸君！ 今回は這界の泰斗大田先生を迎えて……。」と、さけんでみせた。まつ子は顔をしかめていた。

……あまり馬鹿なことばかりするので、親戚の者に無理矢理にこのまつ子と結婚することをすすめられたのは、だいたい歳をとつてからであるといつたが、年齢の相違から見るとまつ子は二度目の結婚の妻かも知れないが、そのことは

その時言わなかつた。ただ近在の衰えた舊家から何も知らぬ娘を買つてきたのだといふことは、まつ子が今でもその親たちを恨み、自分の自覺が足りなかつたことを悔んでゐると、後で私にはなしたことでわかる。私はある春に霧島家の郷土のあたりを旅行したことがあつた。花崗岩質の山はところどころ白い肌をみせながら松の樹に蔽われ、樹蔭には赤と紫とのつじが咲いているのがみえていた。海は紫白色にのどかに日に輝き、山から海にかけては灰白い霞が一面にこめていた。山と海とのあいだには狭い平地があり、麥が伸び、菜種の花がさき、雲雀は霞の中に舞いあがつて啼いていた。柑橘のみのつた丘のかげの入江にそく川ふちには白い倉のある家が立ち、帆柱が家々の屋根のかげにみえる。松並樹を越えたと廣い鹽田がつづき、その向うに海が光り、遠い島のかげが紫色にみえる。まつ子はこゝろしたところの白い道を、長い行列をつくつて霧島の家へ運ばれて、一夜にしてこの巨大な粗暴な男に身を任せてしまつたのである。そして、子供が生れるころには霧島家の財産はまつたく崩れてしまつたのだ。

直接に没落の動機になつたのは放蕩でもなく、政治運動でもなく、彼の縣の生絲の全部を、ある人におだてられて買占め、それが歐洲大戰後に遭遇したために暴落したためであつた。嘉門は財産整理をした親戚たちのために、いくらかの金をあてがわれて禁治産になつてしまつた。郷里で威張つていた彼は、恥を忍ぶ氣にはなれ

ないで、その金をもつて東京に出てきて、何か堅い商賣をする氣であつた。全盛時代に保護してやつた畫家たちが相當名高くなつていたので、彼等と相談して畫商となつたが、それがまた失敗をつづけているうちに、彼は残つた金をもつて、畫家に取巻かれながら、家を飛び出して、京都、奈良、別府、長崎とあそびはけてあるき歸つた時にはまつたく一文もなくなつていた。

その留守の頃から、まつ子は、自分と二人の子供とを養つために、生活をしなければならなかつた。編物をならつて、その稼ぎで細々と生きた。歸つてきた嘉門は、人の世話で勤めに出るようになつたが、僅かな給料はほとんど妻の手に渡ることがなかつた。まつ子はその頃、人のすゝめで基督教の教會に行くようになった。そのことでもなければ、彼女はその不當な運命を忍ぶことができなかったらう。彼女は無理に嘉門まで改宗させてしまつて、酒と煙草をやめることを誓わせてしまつた。

「いままで、僕の言うままになつて、人形みたいな女だつたんですが、クリスチャンになつたかと思うと性格が一變しましたよ。神様々と云い出したかと思うと、僕を逆に叱りとばすようになつてしまつたんです。耶穌教は恐ろしいもんです。ですが僕は散々苦勞させたんですから我慢しています。」

嘉門がこういつて長い話を終つたとき、まつ子は實に冷たい眼の色でさげすむように夫を眺めていた。その眼の光がこの家の冷たい冬の氣

の根源になつてゐるのだと私は思つた。そして、何ということなしのきまり惡さから又當り散らそうとして形相を變えはじめた嘉門を残して二階にあがつたのだが、もうあがり切らぬうちに、私は嘉門の變質的な怒號の爆發と、ますます冷たく冴えたまつ子の聲と、咲子の泣聲とをきいた。

嘉門はそれから外に出て行つたが、しばらくして歸つてくると、私の部屋にきた。

「家の中まで女教師がいるんじやたまりませんからな。ですが、腹を立てて出てはみたものの、風は寒し、懷には一文もなし、酒はのめず煙草はなし、湯がめはするし、……きみ！ 煙草一本お持ちですか。」

私が差出した煙草の數本に彼の心はまた鎮まつた。

「しかしこれは家内には秘密にしていた方がいい。實は去年までは家の中でもそつとやつていたんですが、吸殻をみんな火鉢の灰の底に埋めておいたところが、掃除でそれが見つかりましてね。それをまた家内が教會の牧師にいつて僕に訓誨をたのんだもんですから教會中の笑い話の種になりましたよ。」

私は彼の氣を變えようとして、壁のマテイスを指さして、「繪はお好きですか。」といつた。

「ははあ、好きです。あんなものもつといい版畫を外國から取寄せて賣つたんですがすつかり損をしました。ですが、商賣は別としても繪はいいですな。澤山賣れ残りを持つていました

が、みななくなつた。セザンヌ、ゴーホ……いや、本當をいえば、それよりも女の繪がいいですね。ゴヤ、アングル、ルノアール……ルノアールの女ときたら。」

彼は唾液をぐつと飲みこむようにして眼を半ばとじた。

「ところが、僕が商賣をやめても、そんな裸體の繪ばかり大事にして置いていたんですが、例のクリスチャン主義で、みんな家内が僕の眼の前で焼いちまつたんです。めらめらと裸の女が焼けましたよ。惜しくてたまらなかつたが……あなたはその繪を持つていませんか。持つていたら一枚ここで焼いてみましょう。そいつはたまらんど綺麗にみえるものです。僕はあの時、女の體が焼けるのをみて、興奮してうつとりしましたよ。ほら、昔の帝王は女を焚いたつていうですな。あの氣分ですな。」

私は彼の顔が上氣して恍惚となつて、宙に幻を追つてゐる表情になるのをみたので、氣味がわるくなつた。この男には、桀紂、カリグラのごとき血が流れているのである。彼はそれからしばらく、畫商時代につきあつた畫家たちが、今となつては見向きもしてくれないことをいつたが、彼があつた名前が本當であつたといふれば、それはかなり有名な人達の名も含んでいた。

……嘉門が降りて家の中が静まつてから、私は眠ろうとしたのだが、初めての家の睡眠はなかなか訪れてこなかつた。奇怪なこの家の印象を頭から拂ひのけて眠りにつこうとするので

あつたが、ますます眼は冴えてきたし、風が出たのであろう、樺の樹が悲しげな音を立てるのがはつきりと枕元にひびいてくるのであつた。ずいぶん夜が更けて、私は手水に降りた。廊下の硝子障子の間から、みるともなくみると、嘉門と二人の子供とはとくに眠っていた。嘉門の顔は巨大な子供の顔に似ていて、大きなびきが廊下にまでこえていた。部屋の片隅の暗い灯影に、ぐつたりとしてつかれて蒼ざめたまつ子が崩れるように坐つていたが、純白と淡紅色との毛糸を膝一面に散亂させながら、私にも気づかないで、一心に編みものをしてゐた。その編物がそこに眠っている子達ではなく、どこかの人から頼まれた仕事であらうということには私にもわかつた。二階に歸つて時計をみるともう二時に近かつた。

こうして、霧島家の中での私の生活がはじまつた。

まつたの偶然で、その瞬間まで存在するとも知らなかつた人々が構成している家の中に投込まれたのである。この關係を私は生物の斷面圖をみるようなものだともつた。自分はその生活とは有機的な關係を持つてはいないのだ。自己の家族の中、友人の中での自分の位置は、自分もその有機體の構成の血肉的な要素の一つであるということであるが、下宿というところでは、ある金を拂うということの關係のほかは何もない。そのくせ自己の家族の中でよりも、

もつと明確に、まざまざと細微に、その家族の生態のあらゆることを見るのである。これはある生物を切斷した解剖の圖をみることに同じであつて、ここに臟腑があり、ここに神経が走り、ここに血管が分岐していると、冷酷精緻な知識を思うままに得ることができるのだ。

しかし、この知識は、同時に非常に不自然なものでもある。花の斷面圖をみ、女の斷面圖をみたとしたところで、それは外側から花を愛したり、女を愛したりすることではない。そのどちらがいかといへば、もちろん、斷面圖よりは臆氣ではあらうとも、生きた全貌を愛することを人は取らなければならぬのだ。しかしその冬、霧島家に入つて行つた私は、感情的な對人關係に疲勞して、ひどく厭人的になつていたのである。私は、この家の、夫と妻、父と息子、父と娘、母と息子、母と娘、兄と妹の關係の切斷面、その心理的生理的な反撥と執着の切斷面をみるにつけて、その冷やかで新鮮な知識の角度をよるこんだのだ。そして、できるだけ非人間的な關係に自分を置いてその知識欲をみたそうとした。私のそれからの霧島家での生活は、この態度と、それにもかかわらず自然に私に結びついてくるこの人達との人情的な關係との錯綜であつた。

第二章

私は朝はおそくまで寢床に入つたままで、日

影が東から南の窓まで動いてきて壁のマチイスの繪や、机の上にゆうべからひろげ放しになつた本などを輝かせるのを眺めていた。薄く覺めた耳には朝早く學校にかよう兄妹の聲が下からきこえてくる。咲子はいつものように兄に泣かされていて、ひいひい聲が、いかにも寒そうに空氣をふるわせている。しばらくして、嘉門が必ずなにか呶鳴りながら荒々しく格子戸をあけてゆく。妻を呶鳴りつけないときは、「ああ、この寒いのに、安い月給で、人をこきつかいやがつて。」と、この二階は勿論、隣近所までひびきわたる聲で愚痴を叫び、それから大きなあくびをしたりして出てゆく。

あとのひそやかさがしばらくつづくと、その静かさの底から細々と湧き出す泉のようにまつ子の讚美歌がきこえてくる。はじめはかよく冷たい聲であたりを憚るように流れているが、いつのまにか我を忘れたように、狂熱を帯びた甲高い聲を漲らせる。聲の訓練を経たのでもなく、またこうした讚美歌は年を取つてから習つたのだから、妙な民謡風の節廻しが混つたり半音が絡んだりする。それで私は自分が恥づかりしくなつたかのように床の中で首をすくめたりするのだが、そのうちに、これは堪らないと思ひながらもふしぎな哀しさといふに引き入れられてしまふ。こうした朝の感情の混亂を、彼女の歌も止まり晝近い日射して空中が暖まる頃までにやつと鎮めて、私は下に降りてゆく。まつ子はもはや膝一杯にまざまざの色彩の毛糸を

「亂しながら仕事にかかつている。私はその傍で、不味くなつた味噌汁で朝餉を取りながら「ゆうべ晩くまで本を讀んでいたものですから。」などと言ひ譯する。」

「卒業論文というものは大變なものだそうですね。このあいだ編物を教えに行つたお宅でも大學に行つていられる方があつてそんなお話をききました。」

「そんなことで、うるさい伯父のところから出てきたというわけですが、僕のはいい加減なもので、まあ學校に出ないで朝寢坊でできるだけ儲けのようなものです。——それでちよつとお願ひがあるのですが、聖書を貸してくれませんか。いま調べているところに關係があるので。」私はいま調べているヨウルリッジの詩について、聖書の必要を想ひ出したので氣まわりわるくそういつた。

「お安い御用で。」とすぐ立ち上つて自分の聖書を持つてきてくれたが、少し顔を赤くしながら私をみつめていつた。

「一度教會にいらつしやいませんか、この日曜日にでも。いい先生のお話があるのですが。」

「僕はととも。」

「でも、よくおわかりになつて下さると思ひますけど、あなたがそうして下さるとほんとにいいのですけれど。この前に二階にいらした方も、初めはいやがつておいででしたけれど、私が無理にお誘ひしてから、そのうちにほんとうに熱心なクリスチャンにおなりでした。そして

教會に来ていらつしたいとお嬢さんと結婚なさいました。」

私はさつきの節外れの讚美歌を想ひだした。

「これは堪らない。」と口の中でつぶやきながら、聖書を手にとると、「その内にはいつか。」と曖昧な返事をして二階に逃げた。

それからたびたび勧誘をうけた。それで、それから、日曜日ごとに、特に遅くまで眼がさめないような風をして寢込むことにして、腹が空いて、皆が教會に行つてしまわぬうちは決して起きなかつた。

朝はいつもこういう風だつたのではない。嘉門の勤め方は一風變つていた。朝早く出て行つて、その夜は歸らないで翌日の午後歸つてきて、妻を囁鳴りつけながら、暗くなるまで寢てしまふ。夕方起きてきて私の室にきて煙草を吸ひ、風呂にさそつたりする。四日に一度は一日中勤めに出ないで家でぶらぶらしている。そのような朝は、九時頃になると、きつと私の寢ている室に郵便を持つてきてくれるが、もちろんそれは口實で、煙草を吸ひたいのだが、私が晝前に起きるまで我慢ができないのだ。そうして、私もその相手に、床の中で煙草を吸ひ、そのま

ま、晝頃まで下らない話をして過してしまふ。私はこの習慣には初めは嫌惡を持つてはいたが、いつのまにかその惡習の魅力に慣れて、彼を心待ちするようになっていた。彼が、覺醒のぼんやりした私に持ち運んでくる話は、彼の身邊や市井の道化た話が卑猥な話で、それが彼の口

から出ると、妙に脂つくくしかもとほけた魅力になるのだつた。

「お勤めはどういう工合になつているのですか。」とあるとき尋ねてみたことがある。

「それは、事務のある時無い時によつて違ふんでして、わははは、内閣調査局もいいが不規則なので困るんです、わははは。」と嘉門は笑つて答えた。

私は内閣調査局がどういふ性質のものか知らなかつたし、また知ろうとも思わなかつたから、そんなものだらうかと思つてしまつたのだが、ある時、錢湯で、隣の家の保險會社員が本當のことを教えてくれた。その男は顔見知りだけの間柄であつたのに、なれなれしく私の傍にきて背中を流してやろうといつて聴かなかつた。そして保險の話を持ちかけてきたが、私が取りあわないのをみると、急に耳元に口をよせて、「君は、霧島さんの勤めを知つていられますか。本當のことさ。」といつて、私が少し好奇心をうごかしたとみると、背中を流すのを忘れてしやべり出した。

「——あれは、内閣調査局にはちがいないが、守衛ですよ。長いこと僕もたままされましたよ。ひどくふんぞり返つて、『内閣調査局の方に出勤しとりますよ』というから、すつかり脅かされたんでね。僕も家内も子供もひどく尊敬していたんですよ。口惜しいじゃないですか。大概な守衛なら、制服で正直に家を出るもんですが、あの大將は、いつもモーニングの古いのか何か

着て胸を張つて出るんだから驚きますよ。押出しはよし、大抵だまされません。ところが、その調査局にゆくとき着換えるんですよ。金ボタンのモールつきの守衛服にね。そしてまた着換えて家に歸つてくるんです。——これは嘘じやない。私がこの眼で見届けたんだから。郷里の先輩に保険に入つていただこうと思つてその調査局に行きますと、受付に大將がいるんです。吹きだしそうになるのをこらえて、知り合いだから知り合いらしく僕が『やあ霧島さん。』という大將はおつかない顔をして睨んでね、『姓名は、用件は。』と切り口上でいふんです。そして胸をふんぞつてゐるんですが、やつぱり大いに狼狽して赤い顔をしていましたよ。僕も可笑しさをこらえて『私はこういうもんで。』と名刺を出しましたよ。——その日からもう一月ほど、霧島さんが門口で會つてもそつぽを向きませんでしたよ。』

私はこの話をきいたときに、どうしたものかこの保險會社員の方がうとましい氣持になつて、そのまま風呂を飛び出してきた。それから、嘉門の勤めについては彼にも妻にも話さないことにした。まづ子は後にいろいろと嘉門の性行を私に語つたが、そのことだけは決していわなかつた。この心の離れ合つた夫婦の間に、まだこうした暗黙の共同防衛の心情があることをみて、夫婦というものの奇怪な深さを覗くような心がした。

曇つて底冷えのする十二月のはじめの朝、非番の嘉門は、郵便を持つて枕元にきたが、にこにこして一つの手紙で私の頬を軽く叩いた。それは、しばらくぶりに、庵原はま江という、伯父の家に居たころつきあつてゐた少女からきた手紙だつた。苦笑しながら開いてみると、長く逢わないが、卒業論文はよくできているか、早く片付けて、クリスマスには遊びにきてほしいなどと書きはじめてあつたが、大部分は、この頃新たについたピアノの教師のことであつた。その獨身の中年婦人のピアノの巧さ、人柄のよさ、上品な美しさ、教養の深さ、今何を習つてゐるか、などを長く書き立てて、もうその人に習うのが、何よりも楽しみである、と書いていた。私はその行の間に空々しい心情をみた。夏から親しくなつた運動家のことを書かないのは當然であるとしても、このピアノの教師のことをこんな書き立てるのはどんなつもりか。私の氣を引いてみるというような淺薄な手段を使う女でもあるまい。その手管にかかつて、私がまたこのこと出掛けてくることを計算に入れているほど、私を單純に考へてゐるわけではあるまい。私がこの厭がらせを、ただ厭がらせとして眞直に受け取つて、ますます私の心が彼女から離れて行くことをちゃんと計算してゐるのだ。その道具に、同性との親愛というやうな曖昧なものを持つてきた婉曲さの中に、それが意識的でないとする、ますます恐るべき女性特有の感覺が、この何も知らぬ若い娘の中に本能

的に備わつてゐることを示している。

嘉門は私のその時の表情を見て取るほど敏感ではない。彼はただ紅色の花模様のある封筒と水色の用箋とに仰山に感じ入るだけの力しか持つてはいなかつたから、煙草の煙を私の顔のうえに吐きかけながら、巨大な手で私の肩をゆすぶつた。

「どんなひとですか。寫眞はありませんか。」

「寫眞はありません。破つてしまつたんだから。」

「惜しいことをした。僕が鑑定してあげるんだつた。とにかく、女は、腰が細いのが一番です。」

彼は空中に二つの弧線を何度も何度も兩手で描いて、中のくびれたX形をしめし、眼を細くして、『そうだ、この形の女だけが女です。』といった。

私はふとまづ子の細々とした肢體を空に描いてみた。すると憂鬱になつてきた。身を伸ばして、枕元の机の引出しを開けて、少しウイスキーの残つた小瓶を取り出した。こればかりは、まづ子を憚つて嘉門に見せていなかつたのだが、それを一口のんでから、彼の方に差し出した。彼はぐつと一息に飲んだ。たちまち、彼の顔中は光が射したようになり、眼は霞んで細くなつた。

「ああ、おいしい、これです。これです。」と彼はつづけて三口ほど飲んで、それからべつたと私の枕元に坐つて女の話をはじめた。

「ねえ、君。僕は、女房の體に閉め出しを喰つてゐるんです。これは悪いことをした罰いかもしれぬが可哀想じゃありませんか。キリストはマダラのマリヤと……いや、そいつは僕にはよくわからんが、とにかく、キリストの教えにだつて酒と女はあるんでしよう。」

「そうでしょうな。」

「それで、君はその令嬢とどんな關係ですか。」

「何の關係もありませんよ。」

「君は隠しますね。君のような大學生が娘さんの二人や三人を物にしていけない筈がない。現に僕でも、この内閣調査局勤務のおやじがですよ、……君が話さないから僕が話すが、いいですか……。」

彼が話すところによると、まつ子のところへ以前編物を習いに来た娘をほとんど誘惑出来たやうになつたので、その爲に、以後まつ子は一切女の弟子を家によばないことにしたというのだ。私は、その話から、まつ子の必死な藻掻き、――嘉門の魂を救おうとする徒勞のような努力だけを感じたのではあつたが、その話自體は少しも信じられぬという顔をしたので、彼は、今度はほんとうだぞとばかり過去の話をはじめた。

彼はまだ少年の頃から知りはじめた放蕩のはなしをした。田舎の藝者、家にいた女中、それから後になつて遊びまわつた各地方の賣笑婦のこと、その中には上海、香港のことまであつた。それが嘘でなからうということは、その無技巧な話術の中に、眞に迫つたものがあるのでわか

つた。私はいつのまにか、その話に引き入れられて、喜んで聞いているのだつた。それどころでなく、「それで、腰の細い女が一番いい」ということに達したのですか。」などと、彼を煽てながら、できるだけあくどい、淫猥な話を引き出そうとして盛んに相槌を打つていた。

「この前この室にいたクリスチャンなんかにはとても話せなかつた。」と彼の方でも私を煽てたつもりになつて、一生懸命に話した。中でも一番楽しかつた思い出は、田舎で、小さな紡績の工場を作つたとき、その社長になつて、數の知れぬほどの女工たちを誘惑したときだつたが、それはみな金で解決した。今でもあの郷里には自分の血をうけた、姓も名も知らぬ子供が一杯いるかも知れないといつた。工場からの機械の音が鳴りひびいて、床も机も窓硝子も震えている社長室のなかでキヤツキヤツと笑いこけながら、彼の愛撫に任した圓々と太つた、眞赤な頬と眞白な肌をした、髪の毛の赤い娘。海岸の松林の中まで追つてゆくと、轉げながら彼の顔を爪で引掻いて血を出させたが、まもなく石のやうにだまつて齒を喰いしばつた、色の黒い、乳房の小さい、男のような體をした漁夫の娘。彼の家まで連れてきて藏の中に入れると、ただ涙を流していつまでも泣いていた胸の悪い蒼白い子供のやうな體をした小娘。金と取換えのやうに實に平氣に、品物のやうに體を任した農夫の妻。こうした話を彼は舌をなめずりながらつづけた。

私達は、一時間もそうしたことを話していらうか。そのときに、踊場で小さな物音がした。急に話をやめて、私が耳をかたむけると、階段を降りてゆく忍び足の音がした。私達は、顔を見合わせた。嘉門は私をみてそつと笑つてみせたが、その顔には、ありありと、狼狽の色が浮んでゐた。が、直ぐ立ち上つて、荒々しく下に駆け降りたかと思つと、激しい怒罵の聲がひびいてきた。言葉は亂れてひびいていたので分らなかつたが、立ち聴きしたまつ子を罵つてゐるのにちがひなかつた。まつ子の悲鳴がひびいた彼が毆つてゐるのかも知れない。私は降りて仲裁しなければならぬのであらうが、激しい羞恥心でいつばいになつてしまつていて、いままつ子のところへ降りて顔を出す勇氣などはなかつた。まもなく、表の格子戸が開いてまつ子が出てゆく音がした。編物の講習にでも行つたのであらうか、と思ひながら、私はやや安堵した氣持になつてようやく起き上つた。嘉門は上つては來なかつた。嘉門の顔をみるのうとましくなつてゐた。

早速の啖子が歸つてくると、嘉門は出て行つたので、はじめて下に降りて、さびしやうな顔をしている啖子とふたりで飯臺に向つた。啖子は晝食で私は朝食であつた。母によく似た啖子は私の爲に冷えた味噌汁を沸かし、飯を盛つてくれた。私は、つとめて平靜をよそおつて、學校のこと、友達のことなどをききながら話しかけたが、啖子は私の落着かぬ顔色や舉動を感